

金森修編著『昭和前期の科学思想史』

柳 橋 晃

はじめに 本書の紹介

本書『昭和前期の科学思想史』は、東京大学大学院教育学研究科教授である金森修氏(以下、金森氏)により編纂され、勁草書房より出版された。前回の『科学思想史』(2010)では西洋の事例を扱っているが、本著は、日本における類同事例に関するものである。例外はあるものの、「昭和前期」という言葉は、「原則的に、対象が一九二〇年代から一九六〇年初頭頃までの時期に関わるもの」[金森：413]¹⁾であることを意味している。

執筆者は、前回と、金森氏以外は重なっていない。「総体として現時点での我が国の科学思想史研究の一つの到達地点を体感していただける」[金森：413]と述べられているように大きな自信を持って世に送り出され、姉にあたる『科学思想史』(2010)と共に、我が国における「科学思想史研究」の「到達地点」を示す「総体」をなしている。評者は、四月十四日の論評会に参加させていただいたが、そこで金森氏は、「千部以上捌けている」と仰っていた。この言葉は、人々が科学に対して抱く潜在的な関心の高さを示しているといえる。また、「昭和後期」の編集計画も進行中とのことで、待望の妹が誕生する日は近いと思われる。

内容に関していえば、本書は、金森氏による他の章とは趣が異なる長めの序章で始まり、その後、それぞれ別個の対象を扱った五編の論文が続く。理論物理学、有機化学、人類学、漢方医学、そして、哲学的生命論を対象とする科学思想史である。このように、バラエティー豊かなトピックが揃ったのは、複数の論者が論文を持ち寄ったことによる。

ところで、「科学思想史」とは、「自然界の条理を探ろうとする人間精神の在り方、つまり観察、概念構築、理論構成などを可能な限り綿密かつ複層的に捉えようとする」[金森 2010：36]のものであり、「最終的には〈自然〉をではなく、〈人間精神〉のあり方を語るもの」[金森 2010：47]である。言い換え

ば、科学に対する我々の態度、科学技術を可能なものにしていく科学者の思想に関する歴史的記述ともいえるかもしれない。それでは、我々の態度と科学者の思想は、「昭和前期」にいかなるものであったのか。また、いかに変化したのだろうか。そういった疑問を本書は、投げかけてくる。

以下、内容を論じさせていただくが、本来、全ての章を咀嚼し、研究動向を踏まえて論じるべきところ、評者の力不足ゆえ、序章、第四章に絞った上で論じさせていただくことをお許し願いたい。

1 〈文献のプロゾポグラフィ〉と〈科学史・科学思想史〉の〈衰退〉

本章では、「他の章とは性質を異にする」[金森：1]と述べられるように、「昭和前期」という範囲を超えて、明治後期・大正に関する文献もいくらか紹介されており、非常に多くの現代的文献も組上に載せられている。また、個別的なテーマを絞るのではなく、「相当数に及ぶ対照群を一つの言説空間の中に位置づけ、全体が穏やかな統合的輪郭を描けるような具合に配置すること」[金森：1]を目的とする。方法論的宣言として、序章では、「〈文献群のプロゾポグラフィ〉が試みられるということである。言い換えれば、日本〈科学思想史〉の歴史を叙述するという、〈日本科学思想史・史〉だ。「若干の例外を除き、〈科学哲学〉や〈科学社会学〉は考察の対象外とする」[金森：2]ものの、非常に大勢の人物が取り上げられている。序章の最大の貢献は、「引用という行為そのもの」[金森：2 強調原文]であり、ここでは、「〈分析〉とは質の違う作業」[金森：2]が行われる。また、「これらの領域について私よりも遙かに的確な紹介・俯瞰を行う能力のある人がいれば、その人がどこか他の場所でその作業を行ってほしい」[金森：3]との勧誘がある。しかし、それが可能であるためには、相当の碩学でなければならず、当分、破られることはないように思う。だが、我々

が非常な努力をし、打ち破るべきだろう。

ところで、金森氏は、「科学は技術と連結して多大の産業的裨益をもたらすという意味で重要であるだけでなく、他の文化的領域、宗教や芸術、哲学などの文化的領域と並び称される一種の文化でもあるのだ」という認識が、社会全体の中で希薄なままに留まっている。下手をすると、当事者としての科学者までもが、そんなことは意に介さないという気分さええないではないようだ。科学者の科学思想史に対する態度も、それに類するものになる」[金森：3]と述べる。ここに述べられるように、我々は、科学に関する自らの思想に対し随分と無反省的なのかもしれない。それは、我々にとって、もはや、科学が自明的なものであることを意味している。しかしながら、科学者が自らの思想的な出自を確かめないことで、我々が、科学を文化として、つまり、〈鶴的な学問〉としてではあるが、人文学的な対象として扱えることの根拠ともなる。少々、因果なものだと思えてしまった。また、科学技術に対して、自覚的な態度を採るには、どうすればよいのだろうか。

その後、〈科学思想史〉を考察する上での参照点として、坂本賢三の『科学思想史』(1984)が紹介されている。坂本は、「啓蒙主義的科学思想史」[金森：5]と異なり、科学者にとって自己反省の契機となりえる科学思想史を、つまり、「見えない規定条件や問題状況を白日の下に晒す」[金森：6]警鐘的な科学思想史を試みたようだ。しかし、「科学思想史」と名が入った著書は、国内でこれまでに大よそ二〇冊ほどしか出版されておらず、坂本の著書以降、本書を含め四冊しか出版されていないようで、〈科学思想史〉が比較的マイナーな分野であることが想像される。ところで、本来なら、ここから、金森氏の論文の〈科学思想史〉的論述を紹介してみたいのだが、本稿の「まとめ」に序章の利用の仕方に関する一例をあげておいたので、ここには触れず、「〈科学史・科学思想史〉は一九九〇年後半以降、〈衰退期〉に入った」[金森：72]という〈科学思想史〉という学問分野の動向を説明する論述を追ってみようと思う。なぜなら、これは、「現在の光によって過去を論理的に再構築し、結果的に〈現在の現在性〉を最大の覇者だとして自己理解するような」[金森 2010：28 強調評者]〈嚮導科学史〉に対しての批判、また、「現代史の問題解決に動員され」[金森：82 強調原文]、それに乗った〈科学史・科学思想史〉分野の専門家

への応答とも採れるからである。

金森氏によると、「〈科学技術問題〉は、歴史的分析の対象としてよりは、現代的問題としての色彩を強めている」[金森：73]。そして、専門家たちの間でもそういう認識が採られ始めている。小松美彦氏が例として引かれているが、「〈科学技術問題〉は、〈科学史・科学思想史〉よりも、〈科学社会学〉や〈科学政治学〉の対象としての自己定位を従来よりも強く持ち始め」[金森：74 強調原文]ており、1990年後半以降、「〈科学思想史から科学政治学へ」[金森：75 強調原文]知的布置に関する顕著な変動が起きているのだという。その要因として、1991年の大学設置基準の大綱化により教養課程が「制度的なバックボーンを失い」[佐藤 葛西 鈴木 2008：153]²⁾、〈社会的機能〉の不分明という理由で、講義題目が減ることで、マイナー性に拍車がかかったこと[金森：81]、また、有用性などの〈社会圧〉に押され「現代史の問題解決に動員され」[金森：82 強調原文]、動員されたがることがあげられる。

金森氏自身、『サイエンス・ウォーズ』に、「広く〈科学社会学〉的な研究伝統の存在を知らしめ、科学技術の社会的・政治的・倫理的な分析という問題構制に、より多くの人々が参加してほしいという願い」[金森：82]を込めていた。しかし、SSK³⁾の紹介は、〈相対主義的科学観〉が喧伝されるだけに終わったようで、その後、STS⁴⁾が登場する。STSは、市民の間に科学リテラシーを向上させる機能を担っているのだが、「科学史家もまた、社会的身分の不安定性やそもそもの学問的作業の社会的意味への不安感から、この種の〈社会参加〉を必要としていた」[金森：83]という。金森氏は、STSに一定の効用を見なしながらも、その性格上、議論の〈落としどころ〉が見えてしまうのなら、知的インパクトの在処が欠けてしまう危険があると述べる[金森：85]。それでは、〈社会問題調査官〉に成り下がってしまうのだ。それゆえ、金森氏は、「〈現代性への社会参加〉というような響きのよい言葉に陶然として、もし科学史家・科学思想史家たちが、本来複層的な問題構成を構築すべき自らの役割を忘却し」[金森：85]ているのなら、〈衰退〉と考えられると懸念を示しているのだ。

しかし、この主張は、自らを追い込む覚悟を必要とされる。はたして、金森氏が述べるような透徹したアカデミックな態度を我々は持ちえるのか。

「科学技術や宗教、芸術、政治制度など、社会のほ

ぼすべての事象にはその背後に〈歴史性〉が控えている」[金森：86]。たとえ、自然科学のように強い因果連鎖による〈法則性〉とはゆかなくとも、我々には、〈準・法則性〉を担い、あるいは〈類型的展開〉を遂げる事象連鎖というような理解の仕方がある[金森：86]。金森氏が述べるように、重要な判断を、単純な〈直接的効用性〉に軽率に帰せず、極めて複雑で複合的なものと見抜く力を我々は培うべきだろう。そして、その苗床として〈教養知〉の構築が目指されるべきだと思えた。

2 「昭和前期」の漢方医学の自画像 —科学性の利用のされ方の一例として—

慎蒼健氏（以下、慎氏）による第四章は、科学としての権威と正当性を確保することに成功した西洋医学に対し、「非科学、非合理、迷信というレッテルを張られた側」[慎：311]である漢方医学がどのように自画像を描き、自己を保持しようとしたのかを解明することで、「近代日本における科学観を逆照射する試み」[慎：311]を行っている。本章のテーマは漢方医学の科学思想史であるが、「昭和前期」の漢方医学の学問的アイデンティティーの複雑な形成過程が克明に解明されている。

慎氏による第四章において、実質的に「昭和前期」という括りで分析対象となっているものは、おおむね、東亜医学協会とその関連人物であり、彼らの機関紙『東亜醫學』は研究コーパスの主要なものである。しかし、昭和以前に関することや他国に関することも論じなければ、「昭和前期」の漢方医学の実態が見えてこないため、それ以前の漢方に関わる多くの文献にも当たられている。科学思想史を研究する条件として、多数の文献を妥協なく分析することが前提にされていることがよく理解できる。しかしながら、評者は、医学によく通じるわけではないため、度々、読み進める上で困難にぶつかった。とりわけ、漢方医学の学派分類も細部において非常に込み入っており、複雑であった。役立つかどうかは分からないが、評者が本論文を読み進めるにあたり、参考とした資料を註に記載しておく。では、内容に入らせていただく。

現代では、「西洋医学を科学的、理論的、分析的とする一方で、漢方医学を哲学的、経験的、総合的とみなす」という自画像は、漢医学者たちの間ではほぼ

共通している」[慎：311-312]。つまり、現代の漢方医学者は、自らのアイデンティティーを「科学的」なものとして定位していない。それに対し、昭和時代、漢方医学復興派、東亜医学協会の中心メンバーの一人である龍野一雄は、「昭和の漢方は科学の一分野に置かれてゐることを自覚しなくてはならない方法論としての科学性を賦與すべきことは漢方の発展に對し不可缺の問題」[慎：312 評者孫引き]と述べているように、昭和漢方は科学性の獲得を目指していた⁵⁾。どうやら、現代漢方と「昭和前期」漢方では、アイデンティティーの定位が異なっている。では、なぜ、昭和漢方は、科学性を獲得しようとしたのか。その事情が述べられてゆくことになる。

明治期、「医制が公布された一八七四(明治七)年、全国の西洋医数は五、二七四人、漢方医は二三、〇一五人」[慎：314]であり、漢方医が医療の中核を担っていたようだ。しかしながら、医制は、欧米の制度を参考にしたもので、主眼の一つとして西洋医学に基づく医学教育が目指されていた。その方針は、「一八八三(明治一六)年には医師免許規則および医師開業試験規則が制定され、西洋医の免許がなければ漢方診察を行うことができなくなった」[慎：315]ことに具現化された。こういった一連の制度制定が、明治初期の漢方医たちに非常な困難を要求したことがわかる。長谷川泰は、漢方を国家運営に役立たないものとして、また、医制制定の中心人物である長与専齋⁶⁾は、基礎医学理論、「実物実景」との合致という二点、つまり、実証的学問としての基準を満たせないと批判したとされる。この二人による批判をいかに打ち破るかということが、「昭和前期」の漢方復興論者たちにとっての大きな課題となったようだ。

それに対し、漢方擁護者の反論が述べられる。明治後期、「[機能的、総合的]な漢方医学と[器械的、差別的]な西洋医学の「二大医学の結合」を学術の完成とみ」[慎：317]た和田啓十郎は、内科方面の不備を補うのが漢方医学であるという認識を示した。そして、疾病の原因を内因(間接原因)と外因(直接原因)という二つに区分し、西洋医学は外因しか扱っておらず、内因こそ最も深遠なる原因とすることで、西洋医学の原因論の不十分さを主張する[慎：317]。今日、原因療法といえば、病原体を死滅させることや腫瘍除去の手術などを想像するが、和田は、漢方を身体の生命力を強くし、病原菌を寄生

させないという意味で「実際的原因療法」[慎：318 評者孫引き]とする。和田は、西洋医学の基礎理論を漢方に取り入れることで、漢方が真価を発揮するのだという。慎氏は、和田の『醫界之鐵椎』により、漢方は西洋医学・生物学の用語を援用しながら自画像を描き始める端緒を得たとしている [慎：318]。また、和田は、「妄誕無稽」、「迂遠」との批判を「後世派」漢方に帰し、「古方派」⁷⁾漢方の擁護を試みた。古方派は、名古屋玄医に始まるとされ、後藤良山を経て、その門人には解剖に基づく『藏志』をもつた山脇東洋⁸⁾がいる。古方派の理論的基盤は『傷寒論』であり、こういった古方派の実証主義的性格を考えれば、漢方擁護者たちが、時代の趨勢に適した漢方擁護の基盤として、古方派を持ち出すことは納得できる。「[古方派]は陰陽五行説を排し、『傷寒論』の実証主義を旨と」[根本 2005：143]する学派であり、それに対し、後世派は、陰陽五行説を基礎理論とする学派であり、『傷寒論』以後の金元医学である [根本 2005：143]。そして、和田は、古方派に代表させた漢方医学を「今日に於ては実は漢方に非ずして、日本方と成り済ませる我国独自の医学」[慎：320 評者孫引き]としたとされる。また、自称「漢洋折衷主義者」である湯本求真もおおよそ同様の立場を採っており、細部を見れば、基礎学理に関しては和田を批判した中山忠直についても説明されている。ここまでの詳細な説明と的確な資料の提示は、昭和漢方が自画像を描いてゆく前史である。要するに、「東西医学の長短比較論」[慎：327]が克明に論じられた。ここから、本論文の主題である「東亜医学運動」の内実が明らかにされることになり、比較が漢方内部において行われることになる。

これまでは、西洋医学からの批判を漢方がいかに乗り越えようとしたのかという単純な対立図式だった。しかし、日本の中国進出ごろから、これまでと異なる要素が入り込み、複層的な自画像形成が試みられることになる。ここから、「一九三〇年代に古方派、後世派、折衷派が従来の学派を超えて協力し拓殖大学にて漢方医学講習会を開催、さらに東亜医学協会を設立し、『漢方診療の実際』を共同作成した時期の分析こそが漢方医学史にとって重要であり、この時期に成立した漢方医学の自己認識が現在の漢方医学における自画像の基盤になっている」[慎：313-314]こと、つまり、大陸進出時の東亜医学協会とそれに関連した人物の内実が明らかになる。

漢方医学は国家に無用な学として批判されていたことが指摘されていたが、「日華満三国の文化提携を実行していく」東亜医学協会の漢方医たちは、それに対する打開策として、「東亜共同体」という日本・中国・満州の「文化提携」の鍵として自らを定位することを試みた。日本漢方医は、大日本帝国が中国に進出する際に民族の壁をつきやぶる「帝国の道具」と自己認識したとされる。皮肉にも、漢方医学が自己の立場を優位なものとするためには、帝国の大陸侵略政策が必要だったのである。そこには、東亜共同体建設の肯定という立場が明確に示されている。

この後、慎氏は、非常に興味深い言葉を、東亜医学運動のイデオログの一人、大塚敬節から引いている [慎：326] のだが、慎氏が中略した部分にも興味深い記述があるので載せたい。大塚は、「日本は平和を愛する國民であるが、一朝事あれば斷乎鬪争攻撃を開始する、而してかくの如き民族性は、我國の風土に影響されて、生育發達して來たもので、和辻博士によれば、我が國民性は颯風的であるとさえ云はれてゐるのである。(中略)。我國民性はモンスーン風土の特長たる受容的、忍従的であると共に、殊に我國特有の颯風の性格を持つてゐる」[大塚 1939b：1] と述べる。慎氏による引用箇所と合わせてまとめると、中国では大半の漢方医が「平和の剤」のみを用いるのに対し、日本の漢方医は攻撃的治療（「攻撃の剤」）を基本とする傷寒論に基づくのだが、この攻撃性は、和辻が述べるような風土的な理由に育まれてきたとされる。恐らく、日本漢方医たちにとって、自らが傷寒論を採用したことは、「モンスーン風土」に育まれた自明的かつ必然的なものであり、傷寒論に基づくことで、中国漢方に対して日本漢方の優位が説かれ、日本漢方医が中国漢方医を教育する必要性が主張される。それは、東亜共同体における日本の指導的地位の担保であったとされる [慎：326]。つまり、科学性、実証性が、医術/医療実践における「優劣の序列化を生み出し」[慎：326]、明治期の日本における漢方批判と同様の対立構図である。和田が批判を「後世派」に帰すために「強き薬」と「弱き薬」とした区分は、大塚の「攻撃の剤」と「平和の剤」にそのまま重なると思つた。そして、慎氏は、話を朝鮮に移す。京城帝国大学医学部薬理学第二講座の杉原德行は、大塚など「内地」の漢方医たちと連携した活動を採ったようであるが、東亜大陸の新秩序建設のため、「新東洋医学」の建設を志し

た。歴史の画期に医事の改変が行われているという理解から、医事が社会秩序建設の先験をなすと考えたようである。そして、杉原は、朝鮮の漢方医学を「東医宝鑑派」と一括することで朝鮮の伝統を捏造し、朝鮮の伝統医学からは学ぶべき点がないとした[慎：334-335]。西洋医学的見地から漢方の妥当性を評価する場合、「傷寒論至上主義」が展開され、新東洋医学の建設から朝鮮漢方は除外される。従って、「朝鮮漢方医たちは「善導」の対象でしかなかった」[慎：335]。東亜医学協会のイデオログである大塚は、「此れに科学の洗禮を加えることは、彼らの宿望でもあり、我等の抱負でもある」[大塚 1939a：1]と述べたが、杉原の態度は、この路線をさらに強めたものといえる。それゆえ、慎氏は、「昭和前期」の漢方の自画像を「きわめて政治的な「東亜」を掲げて、帝国全体でのヘゲモニー闘争」[慎：336]に臨み、西洋医学を基準とした漢方評価に基づき、「日本漢方医学は中国の伝統医学に比べて科学的であるという認識」[慎：336]を強調し、新東洋医学から朝鮮の伝統医学を排除するものとまとめたのである。

このように、第四章では、「昭和前期」の日本漢方医学が、その時代状況に対し、どのような立場を採り、いかなる自画像を形成していったのかが述べられている。確かに、日本漢方は、帝国のアジア侵略に肯定的な立場を採り、中国や朝鮮を善導しようとした。しかし、東亜医学協会のホームページを見ると、現在、非常に精進しているのが分かる。彼等からすれば、このような否定的な歴史を知ることが辛いことだが、このような事実を確認することで見えてくるものがあると信じたい。もしかすると、慎氏にも辛いものがあったのかもしれない。だが、慎氏は、この姿勢を貫き、素晴らしい論文を書き続けるべきである。

まとめ

前提とされる知識をあまり持たない者にとっては、本書は、読み込むのになかなかの労力が必要だ。しかし、考察の鋭さと妥協のなさが、読み手を惹きつけ、論者の重厚な思想との粘り強い対峙を促される読み応えのある著作なので、是非、じっくり時間をかけて読んで欲しい。とりわけ、これから科学との向き合い方に迫られることが必至な若手世代に勧めたい。また、巻末のインデックスが非常に充実し

ているので、事典代わりに部分的な記述を追いながら、関心を持つところを起点にして理解を深めていくことも可能だ。特に、金森氏による序章は、これに適した構造を持つと同時に、〈隠れ新書〉的な役割を果たしている。

本書は、科学者たちに、また、科学が自明性を持つ時代に生きる我々にとって、自己反省の典拠とならねばならないだろう。なぜなら、科学は「自明性が高いだけに、これに自己省察を加えることは常に意識的自覚的に行われなければならない」[舟山 2010：ii]のであるから。それゆえ、金森氏たちによるこの努力が、「〈教養知〉という殿堂」[金森 2011：148]に入り、我々が科学に対し反省的に関わる際の現代的古典になることを願わせていただく。

欲を言えば、科学と教養について、随想的な論述ではあるものの、未だにアクチュアルであり続ける問いを発していると思われる唐木順三も取り上げて欲しかった。

註

- 1) 本書からの引用は、各章の執筆者と該当頁数のみ記す。
- 2) 大学設置基準の大綱化と教養教育について述べたものに、[佐藤、葛西、鈴木 2008]がある。
- 3) [Sociology of scientific knowledgeの略] [金森：101]。
- 4) [Science, Technology and Societyの略語] [金森：103]。
- 5) 慎氏も引いているのだが、東亜医学協会の中心人物の一人である大塚敬節は、同年の『東亜醫學』第一号の巻頭言のタイトルを「科学の洗禮を経たる漢方醫を養成せよ」とし、「此れに科学の洗禮を加へることは、彼等の宿望でもあり、我等の抱負でもある」[大塚 1939a：1]と述べていた。ここで、「此れ」とは漢方医学であり、「彼等」とは「支那百萬の漢方醫」である。因みに、東亜医学協会のサイトは、非常に充実したものであり、『東亜醫學』は、1939年の第一号から1941年の第二六号までpdfファイル形式でダウンロード可能である。東亜医学協会のサイトは、aeam.umin.ac.jp。
- 6) 「長与専斎は、あとで述べますように、実は洋漢の融合した新医学を目指した」[松田 2002：596]ののだという。
- 7) 「古方派を字義通り解釈すれば、古医方すなわち張仲景方を宗とする学派」(東亜医学協会サイトにおける電腦

資料庫内の「(リンク版) 日本先哲医家資料集」のページから引用aeam.umin.ac.jp/siryouko/nihonika.htm#i_20 (最終アクセス日2012年5月3日)。『傷寒論』は張仲景によって著された。また、明治以前の漢方のあらまは、[根本 2005:142-143]、[安井 2007]が扱っている。

- 8) 山脇は、「日本で初めて“観臓”を行った」人物(東亜医学協会サイトにおける電腦資料庫内の「(リンク版) 日本先哲医家資料集」のページから引用aeam.umin.ac.jp/siryouko/nihonika.htm#i_20 (最終アクセス日2012年5月3日))。人体解剖に関する官許を得る以前、山脇は、その当時人体に似ているといわれた獺の解剖をしたのだという。松田は、「古方派の一部は蘭方へと接近し、我が国における現代西洋医学の源流とも」[松田 2002:596] となると述べる。古方派の西洋医学との親近性が窺える。

引用・参考文献

- 大塚敬節 1939a:「巻頭言 科學の洗禮を經たる漢方醫を養成せよ」『東亜醫學』第一號、1頁
- 大塚敬節 1939b:「漢方醫學に於ける和と攻の精神」『東亜醫學』第十八號、1頁
- 金森修 2010:『科學思想史』勁草書房
- 金森修 2011:「公共性の黄昏」『現代思想』12月号、136-150頁
- 佐藤、葛西、鈴木 2008:「《鼎談》これからの教養教育」葛西康德、鈴木佳秀編『これからの教養教育—「カタ」の効用—』東信堂、153-177頁
- 龍野一雄 1939:「漢方と神秘主義」『東亜醫學』第十一號、1頁
- 根本幸夫 2005:『やさしくわかる東洋医学』かんき出版
- 舟山俊明 2010:「まえがき」『哲學』第123集、i-ii頁
- 松田邦生 2002:「日本漢方の伝統と発展——臨床医の立場から——」『日本東洋醫學雜誌』第53巻第6号、595-604頁
- 安井廣迪 2007:「日本漢方諸学派の流れ」『日本東洋醫學雜誌』第58巻第2号、177-202頁